

明治維新以前は「箱館」と呼ばれていた北海道函館市。言わずと知れた戊辰戦争の最後、箱館戦争の舞台です。今回は函館市内13箇所の史跡を巡ってきました。時間の都合で、市内でも南部、五稜郭以南しか行けなかったのですが、この旅はボクにとって、理想と現実(史実)を噛みしめる旅になりました。史跡紹介の前に、まずは箱館戦争の概略をご説明します。

明治元(1868)年8月会津での敗色を知った土方歳三は仙台へ向かいいます。10月、旧幕府海軍副総裁、榎本武揚と合流し、徳川家臣の新天地を求め海路蝦夷地を目指しました。独立政権樹立を願った彼らは新政府軍(以下官軍)から五稜郭を奪い取り、現在の道南地方、松前藩に兵を進めて駆逐し、蝦夷地を平定。国際法に長けた榎本はイギリス、フランスに「オーソリティー・デ・ファクト」。つまり事実上の政権と認めさせることに成功しました。12月15日、五稜郭での入れ札(選挙)により総裁に榎本武揚、陸軍奉行、大鳥圭介らを選出。その際、土方歳三は陸軍奉行並と箱館市中取締、陸海裁判所頭取を兼任することになります。ここに徳川家臣による蝦夷地開拓を主たる目的とした「蝦夷共和国政府」を築いたのです。この明治元年12月15日から明治2(1869)年5月18日の降伏までが戊辰戦争最後の局面、箱館戦争の定義とされています。箱館政府はわずか5ヶ月しかなかった訳ですが、この頃日本には政府が二つ存在していたこととなります。ボクはこの史実を噛みしめる度に‘なまら’ロマンチックな気分になるのです。蝦夷地の浜が見えてきた時、彼らの心中はどのような想いだったのでしょうか。それでは史跡のいくつかを振り返ってみましょう。

まずは五稜郭(表紙写真)から。日本でも数少ない「西洋流土塁」と呼ばれる洋式城郭。平定後、五稜郭から祝砲を上げた時はどうだったのか、想像するだけで高揚してくる。ここで政治を執った榎本ら。迫り来る官軍を前に、本陣のあるこの地でどのような心境だったのか。4月に入り、物量に劣る榎本軍の戦況は日に日に悪くなり、箱館の街にも官軍が侵入してくる様相を呈します。途中首脳陣の中には官軍に降伏する意思もあったようですが、土方は断固これに反対。「寛典に処すとも吾何の面目あつて、また昌宜(近藤勇)と地下にまみえんや」と、先に死んでいった仲間のために最後の最後まで戦うことを止めない、思いがこもった力強い言葉です。土方は、決戦の時が近いことを知ります。側近の少年隊士、市村鉄之助(16歳)に遺髪、写真、辞世の句を持たせたのです。句には「よしや身は蝦夷の島根に朽ちぬとも魂(たま)は吾妻の君(徳川慶喜)やまらむ」とありました。市村の将来を期待し、戦場から遠ざけるための命令でした。市村の後姿を見送った彼の目は、敵を見据える目線とは全く違う、きっと親が見送る目線だったと思います。土方が怒りの声を上げ、時に落涙し、そして覚悟を決めた五稜郭。感極まる間に滞在時間は過ぎていきました。

函館市街は常に、何者かに、見下ろされている妙な緊迫感に包まれています。圧倒的な存在感を放つ何かに。それは山。そう「函館山」(表紙写真)の存在です。五稜郭から南へ約3kmに位置する函館山。標高、334m。しかし坂の勾配は非常に急で、中腹には箱館奉行所、新選組の屯所があった称名寺があり、西側の麓には弁天台場などがありました。山自体が要塞。山よりも南は海。箱館山はまさに、天然の城壁なのです。箱館湾には軍艦もあり、山付近の守りは非常に堅固でした。北の五稜郭周辺と南の箱館山、箱館湾を防衛線にした榎本軍に対し、官軍は5月11日、箱館総攻撃を開始します。箱館湾には艦砲射撃が。五稜郭、箱館市中に向けては陸軍隊が進発。午前3時開始だったそうです。

そして夜中、舟で漕ぎつけた官軍は…。何と山を南からよじ登り、山頂から奇襲をかけたのです。あまりにも突然のことだったので。背後から意表をつかれた箱館勢は総崩れとなり、弁天台場まで退却、籠城することになります。

その時土方は五稜郭。彼はどのような表情でこの山を見上げたのだろうか。ロブウェイで上り、展望台から望む函館市街。カップルや家族連れしか居なかった函館山の展望台。夜景があまりにも有名なその山には、何とも言えない切ない歴史がありました。

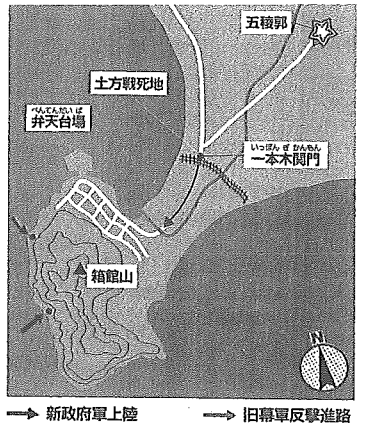
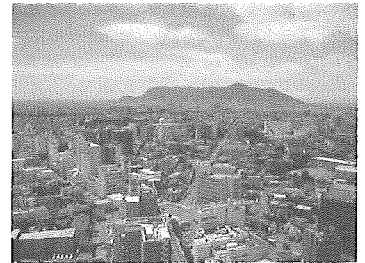
土方歳三は、五稜郭から額兵隊約50名を率い、新選組救出のため出撃します。五稜郭から南へ約1.5km。現在の若松町に、一本木という関所跡があります。箱館政府が通行税をとった関所で、往来の際必ず通らなければならなかった。凄まじい市街地での戦い。この一本木まで敵の勢いは迫り、見方が圧されてくる。土方は、何とか盛り返そうと叱咤を繰り返します。鬼気迫る徹が突ったのか、異国橋まで敵を後退させた土方。彼を狙い、官軍兵が銃を構えた。その刹那、一発の銃弾が発射された。鋼の弾が土方の腹部を貫いた。土方は卒倒し、落馬した。部下が近寄ってくる。声を掛けた。しかし既に息はなかった。土方歳三は、遂に一本木関門で戦死しました。享年35。土方歳三最期の地、一本木。ここには関門の一部が再現されており、碑が建てられています。凛とした表情の土方の写真。配された位牌に刻まれている戒名は、歳進院殿誠山義豊大居士とある。ボクも静かに線香を上げさせていただきました。

弁天台場で生き残った、最古参の隊士、島田魁の綴った『島田魁日記』の四月二十三日にはこうあります。「総督(土方)自ラ樽酒携へ諸壁シテ兵ニ贈リ謂フ、汝等ハ歩卒ニシテ能防リ、官軍ハ士ニシテ且ツ衆、吾常ニ賞嘆ス、且ツ汝等戦幾許リ、日五十回ニ下ラズ、汝等牧野駿州公治下妙見山ニテ風雨ヲ侵シテ戦フ、昼夜其烈シクシテ久シキハ奥羽越ノ三州ノ戦ニ此ニ過ル無シ、今日ノ戦ニ汝等ヨリ見レバ兒童ノ戯ナリ、吾重賞ヲ与フ、然レドモ酔ニ乗ジテ軍律侵ヌヲ患、只一椀ヲ与フ」と。口語訳してみよう。「歩兵なのにお前らは実に良くやってる。薩長は士官の上にウジャウジャ居るつてのになア、俺はいつも感心してる。お前らは何回戦ってきたか。五十回は下らねえだろ。長岡でも風雨の中戦った。奥羽越でも昼、夜関係なくぶっ続けでやってこれよりもキツかった。今日のなんてお前らからしたらガキの遊びだ。俺から褒美をやる。(含み笑いで)ただし、酔っ払ってシマリがないのは困るから一杯だけにしとけ。こんな感じでしょうか。物資の乏しさに元々めかして部下を励ます感動的なエピソードです。同じく、弁天台場生き残りの隊士、中島登は戦友を描いた絵詞『戦友姿絵』を残しており、「生質英才ニシテ飽迄剛直ナリシガ、年ノ長ズルニ従ヒ人温ニシテノ掃スルト赤子ノ母ヲ慕フガ如シ」とあります。

遠く蝦夷地に渡った土方は、人間的な厚みを増し京都時代の鬼副長から、部下の気持ちや波んでやれる指揮官に成長していました。‘母親のように慕われる’ぐらい信望の厚い側面を持っていた土方歳三には、時代を超えた普遍的な理想が溢れています。それは同じ時間を共にした人間にしか言葉にできない情、思いに他なりません。ナマの言葉が交わせる人との間で生きていきたと感じた、実りある旅でした。

今日5月10日は、土方歳三命日の前日です。見習う事の多い素晴らしい先人に、合掌。 誠

press collective



→ 新政府軍上陸 → 旧幕軍反撃進路

Kengo Matsui、アルバム‘m.f.g’を大いに語る

Kengo Matsui(以下K):今回のCDは、以前collectiveにも参加してくれた画家の大塚奈緒子さんが、個展を開くにあたって、僕に音楽を提供してくれないかと依頼したことがきっかけです。その個展のために、これまでに作ったもので個展にあいそなものや新たに作ったものを組み合わせるCDにして提供したものが、“music for gallery”という今回のCDです。個展のテーマが「SABI」(=寂び、錆び)というテーマだったので、それを意識したものをやりました。もともとエレクトロニックな音楽を好んで作っていたので、きれいな音に錆ついたようにノイズを絡めたりしたら合いそうだなと思って。

Tawaki(以下T);m.f.gというのはmusic for galleryの略ということですね。ブライアン・イーノの作品にmusic for airportというのがありますが、彼の作品にインスパイアされたというようなことはありますか？ イーノの作品は従来の音楽に比べ自己主張が弱いのが一つの特徴となっています。僕はkengoのCDにも良い意味での「自己主張の弱さ」を感じました。

K:イーノの“music for airport”は聴いたことがないんです。イーノのことは意識してなかったですね。「自己主張の弱さ」については、やっぱり個展のために提供するものなので、「主役は絵」であるということ、主張しすぎないように心がけてはいました。スルドイですね。絵を見ていて邪魔にならないように、でもSABIという個展の“空気感”は作れるように意識しました。サティとかってわけでもないですけど。だからこのCDは、何かしながら聴くのがいいかもしれないですね。

T:そうですね。確かに「ながら聴き」に適した音楽だと思えます。僕は20歳ぐらいの時、ダンスミュージックから少し距離をとり、エレクトロニカやサウンドアートと呼ばれるようなフィールドに関心をもっていたということもあり、m.f.gのようなコンセプトの作品が非常に心地よく耳に入ってくるのです。先進的なギャラリーや美術館などに行けば、しばしば、池田亮司やalva noto、mego、raster-noton周辺の音楽を耳にする機会がありますが、僕にとって、それらは非日常的な音楽なのですね。それに比べてkengoの音楽は極めて「日常的」という印象を受けます。

K:たしかに彼らの音楽は日常的ではないですね。よりアーティストックな音の表現、従来の音楽の枠組みの拡張を目指しているように思えます。僕の場合は、これはcollectiveというパーティ自体のコンセプトとも重なるんですが、「新しい音の表現」という領域よりは「普通であること」とか「日常の延長」というあたりを目指しています。超先進的なコアラシータだけではなく、もっと一般的に多くの人が楽しめる音楽を作りたいと思っています。でもそれは必ずしもポップスなどの形態をとる必要はないと思っています。今回のプレス・コレクティブでは、コレクティブのオーガナイザー、kengo matsuiのCDリリースにフォーカスを当て、tawakiがインタビューをするスペシャル企画。以下、tawakiはT、kengoはKと表記します。

T:8トラックで構成された「m.f.g」というタイトルのアルバムですが、僕は既にこのうちの数曲をライブやpodcastの配信なんかで知っていました。kengo matsuiは旧友ということもあり、隠れファンだったのですが、アルバムがここまで充実しているとは思いませんでした。今回、このようなかたちでCDをリリースした経緯はどのようなものだったのでしょうか。

僕はテクノやエレクトロニカをベースにしているけど、そういう音楽の要素、ミニマルであったり、インストものであったり、意図的なノイズが混じっていたり、ドラマ性が少なかったり、というような要素をもっとマイルドで聴きやすい音楽にすれば、先進的なアーティストが切り開いた音の世界をもっと多くの人が楽しめると思って作っています。僕はテクノやエレクトロニカの音や価値観の美しさに惹かれているし、それは別にマニアックな人たちだけのものではなくて、もっとたくさんの方が楽しめるものだと本気で思ってるんです。だからtawaki君のこういう感想っていうのは、とても「伝わったなあ」という感じがして嬉しかったです。

T:音楽にさほど詳しくない人が同じ空間に居ても心地よく感じてもらえるようなアルバムですよ。だから、僕もこのCDを普段テクノとかエレクトロニカを聴いていない友人に貸したりするんだけど、概ね好評なんです。よ。やっぱり間口の広さがあるんですね。かといって奥行きがないかといえば、そうではない。僕はわりと飽き性なので、同じCDを何度も聴かないタイプなのですが、m.f.gは耐久力があるんですよ。なかなか飽きない。というより、「飽きる」という概念とは縁遠い作品なのかもしれないですね。あまり賞賛していると、安っぽい広告みたいになるのでkengoの名誉のためにもほどほどにします(笑)。以前、kengoと話しているとき、毎日m.f.gを聴いていると言っていたのにはウケました。「親バカ」だなんて。でも結局のところ、飽きない音楽を自分で作っちゃったということなのかもしれないね。

K:(笑)。まあ自分で作るものだから、当然自分の好みにはばっちりだしね。でも普段テクノとかエレクトロニカを聴かない人にも気に入ってもらえるのは嬉しいなあ。ほんとに個展で流れるわけだから音楽聴きにきてるわけじゃない人にも「おっ」って思ってもらいたかったし、邪魔にならないようにっていうのを心がけたのが良かったのかもしれないね。飽きないっていうのはやっぱりある程度の濃度に押さえてるのと、ポップさみたいなものを残しているからかもしれないですね。ピーチネクターはおいしくて毎日飲める人は少なくて、でも緑茶は毎日飲める、みたいな感じかな。

T:要はバランスなんですよ。甘すぎてもダメ。苦すぎてもダメ。やっぱビター・スイートがいいわけじゃないですか。特に齢を重ねていくと、そのあたりを重視しちゃいたくなります。人生論みたいになるけど、生き方もイズムを押し出しすぎるのもしんどいし、イズムゼロというのも悲しいわけですよ。このあたりのバランスは本当にみんな苦勞するんだろうけど。ただ、自分自身が最近、生き方のバランスを意識しているせいか、聴く音楽の趣向もバランス重視みたいなどころがあるようです。コレクティブも、ある意味では「バランスの妙」を考えて始めたわけで、コレクティブの空気感が好きな人たちならkengoの作品もフィットするんじゃないでしょうか。

K:そうですね。バランス。難しいけどね。collectiveで普段プレイされている音楽と少し違って、ハウスやディスコの享楽や熱狂みたいなものは表面的にはないんだけど、collectiveの持つ平熱ないしは微熱の美学みたいなものとシンクロしてるんじゃないかなと思います。ぜひcollectiveに遊びにきてくれる皆さんにも聴いていただきたいです。

T:このアルバムの最大の魅力は個展用に作成された抽象的な3曲と比較的輪郭のはっきりした5曲がバランスよく配置された構成美にあると思います。旧知の間柄という関係を差し引いても優れた作品だと断言できる代物なので、是非みなさん、「m.f.g」を手にかけてください。

極私的ハウス噺 “itaru wakui” 「ディグの巻」

こないだ近所をブラリ歩いておりましたら風呂屋になにやら張り紙が。近づいて確認してみると廃業のお知らせではありませんか！ 最近しばらく行ってなかったし、僕が行くときもガラガラに空いて、時には男湯貸し切り状態なんてこともあったりして、そりゃまあキビシクまではあったのですが、しかしいざ廃業のお知らせを見ると一抹のサビしさを禁じえないのであります。去年あたりから新譜を扱うレコード屋も閉店したりWeb店舗のみになったりということがあり、一時の勢いほどこへいつしまったのかと思わせるサビシイ状況があります。東京のYellowというクラブも閉店するようで、こうした状態はますます加速していくのかもしれない。かくいう僕自身も近頃は新譜に手を出すこともめっきりと減り、クラブにさえ行くことが無くなっているの、そうした衰退の下支えをしているようなところもあるわけですが。

というわけで毎度おなじみのこの駄文、今回は何をとりあげようかとウンウンと考えていたのですが、考えてもネタに困り気味で、しょうがなくレコード棚からいろいろ引っ張り出してはターンテーブルに乗せていました。それにしては家にあるレコードを見ているとそれがどんな曲だったかというのはいちいち思い出すが、それにプラスして思い出されるのは買ったときの状況やクラブで聴いたときの状況です。「あー、コレはいろいろ探しまくっててたまたま大阪のあの店で見つけたなあ」とか「そうそう、コレは不意に入った渋谷のあそこ置いてあって、あんときは軽く興奮したなあ」とか「あのDJがあそこかかけてたなあ」とか、まったく他の人とは共有できない個人的な思い出がレコードの溝と溝との間からは染み出てきます。たとえばsylvesterという歌手の「some one like you」という12インチシングル。これは神戸元町のハッフルベリーという中古盤屋でみつけたものですが、キース・ヘリングのイラストのジャケットにラリー・レバンのリミックス入りということで、新譜のハウスからディスコ/ガラージへと聴く曲がかわりはじめていた当時の僕は「おお！！ まさにガラージ！！」と興奮しつつ購入した記憶があります。残念ながら「この曲は文句なしにカッコイイ！」と推奨できるわけではありませんが、そのレコードとの出会い思い出すにつけなかなか手放すこともできず、そんなこんなでいつしか部屋のレコードは増殖を続ける一方でヤバイことになってしまっているのです。てなこと、今回は表題通りに「極私的ハウス咄」をしてみました。悪しからず。爽やかな風が心地よい季節、みなさんも素敵なレコードディグを楽しんでください。

ちょっとページが空いたので、オススメのレコ屋を紹介したいと思います。今回はダサくて最高のblue soul recordsさん。場所は大阪随一のオシャレスポット南船場。同地区にあるespecial recordsが南船場に馴染んだハイセンスなレコード屋だとすると、blue soul recordsは正にその対極。暗い店内、少ない客、やる気のなさうな店長。このレコ屋を形容すると悪い要素ばかり書き連ねてしまうのですが、実際のところはリスペクトしているのです。まず、値段。やっぱ、他のレコ屋より断然安い。店長さんは思い切り無愛想だけど、値段に彼の良心を感じます。そして何より品揃え。blue soul recordsはブラックミュージック専門店ということもあって、ジャズ〜ソウル〜ファンクの品揃えがピカイチ。客が少ないことも手伝ってじっくり視聴ができます。もちろん店長さんはブラックミュージックに造詣が深いわけで、突けば色々と言葉が引き出せます。いわゆる生き字引というやつです。ちなみに僕がcollectiveでかけるメロファンク路線はだいたいblue soul recordsでディグったものなのです。オシャレな人は覚悟して行くように。(tawaki)

blue soul records
中央区南船場4-10-25第3飯沼ビル6階
<http://www.bluesoulrecords.jp/>